朝顔日記

宇治川篇

一

六月十七日

十

特別
へ13
4268
1

高砂玉光堂

ヘ13
4268
1

柳吐芽清日三竿喜
美初晴風裏譜
淮河世事三月失
時小人之先一取
定龍仙史

91-2156

仙史東海旅客自去春寓居
于百濟巷也東廬在近是以
數往來唱和于其客舍已知
其有識今茲辛未春將東
而告別也余之盛久志適脫
葉私意仙史之文詞足緣飾

此書以乞弁言仙史笑而歸明
日復過其寓居窺其帳中闃
而無人遽問主人則曰史已東
矣而柳陰鶯語猶接其音容
也惆悵可知但見題壁一絶
則春朝晏起〻化情致不可

言ハ附卷首以遂初志云此舉
余豈無意讀者思量柳浪
識于大阪〻米街

非山維嶽
何靈降神
鍾得其秀
生斯韻人

阿蘇真形圖

文武

這個

賢君

大内行滿興

情色

俠

第一

花魁

遊君瀬川

或寛或
猛經
濟
良弼
子產
不死

駒澤春雄

如月似雲風石標致
文君復生

澤雪

假悪
惟考
結果可講
仏縛羅院
奸叔舅狼
生
漏天
綱
山岡玄蕃允秀門

當丶粧
國粹
丑鉏
奸
洛華柳嫩賛
冷泉帶刀為猛

水青
青娘才慧
愛惜鸞雛

加人芸哉い雜劇の作者なり我のうゑ藁の情
張をはられまその稿一巻まも完まして彼のむの
乃ゝ哀ときゝえぬ哉もと予お臣て遊めを久しく一夕物く
下よこの侍ゝ秀さかゝり哀されとそうまの小程面ぬれて再
度きまとうれさるのもしこゝひ或のそくのすこのうて業の
繁をんさしなくこいつけしら枝葉おひ茂りていつしか
七局の冊子とるぬよて彩顔見花と名つけていちう度
かゝろまし哉は多あるのゝ

法印兩香園主人

朝顔日記姓氏譜畧

諸侯

菊池左馬權頭武頼朝臣
大内介多々良滿興朝臣
太宰世子龍壽丸君　父少貳殿

武人

山園玄番允秀門
冷泉帶刀爲猛
駒澤次郎左衛門春雄
岩代瀑布太
笆虬之進　父虬太夫
花周山十郎
吉弘市正
相良主馬
駒澤祥一　父了菴
秋月弓之助推朝
荒尾虎橘　父弥平左衛門
小野右近

瓜生主水
安積潤藏

湯淺勘兵衛

陪

健卒傳藏
僕　關助

女流

紫光禪尼
嫩拍
水青
淺香
伽縷羅院母
夜珠

雲居方
蘭
深雪
真柴
茂
瀬川

沙門

智遠慧長老

祠官

加茂縣主祐包

月心

醫者

荻野祐仙

卜者

佐伯一清

修驗

伽縷羅院

橘雞庵

庶人

助吉兵衛

脫罠狐

木綿屋徳兵衛

大津庄官名傳いらず

朝顔日記譜畧

朝顔日記目次

○一之巻

一回 雲　二回 花　三回 鶴

○二之巻

四回 歌　五回 螢　六回 蘭

○三之巻

七回 月　八回 船

○四之巻

九回 踊　十回 文

○五之巻

十一田 諫　十二田 畸

○六之巻

十三田 關　十四田 川

十六田 柴　十五田 豹

○七之巻

十七田 蟲　十八田 猪

二十田 壽　十九田 虫

以上

朝顔日記巻之一　故芝叟遺話

柳浪 著

○一田 雲

あさゞほいけさまゝ　ふされかへてさうひさしゝれ花よぞ

けうをけるさまゞ此葬よつけて。いと愛たれ傳奇ふんあるを。

當初肥後の國ゟ宮城廉助春彰といふものあて代々國司菊池

殿ゟ仕て　四百石餘の采地ゝたまはて夥の家隷を扶持し。男

女の子寶ふさゝ富て。何不足ふき家道おて。おの廉助繁く

隼實の天賦ふるゝへ博學のゝまをあるゝ。主君菊池殿の

御心ふかゝひ。いちゝやく擢用あて。儒學教授の職ゝ掌

とらしゝめ給へ。夫より廉助ハ日ごとゟ學技ゟ往還て。一藩の

子孫に訓導せり。さて此宮垣ゞ莊院い菊池川の涓紅鶴林と
いふ地方あり。この菊池川ハ東南のうさまる萬重の山より落合
大河にて。逆巻水い巴渦をふし。激怒濤い奔馬よ昊ならず
胴猟蛟螭もをむべくおぞえて。もの凄まし江勢頭なり。後
背よい名たくる阿蘇ゞ嶽高く聳て。絶巔より火焔喪くと燃
あがり。その音雷霆のごとく震ふさゝき。百道黒煙くだまを
て中天に焦し。時あつて泥とふらし岩に飛を。鷲鵰もこを
ぶためよ怖のき翔。豺狼もこを見てかくをふす。周圍の巖壁
い宛も削成ごとく。雲樹いやゞ上よかさなて。ほねよ金烏を
呑玉兎に吐く。其高さ幾千仞とうぎり知らず。まことに
こを十分猛悪げふる山の形勢よて。こを仰げば毛髪を
森竪ごとふて。ほねひねゝ薩摩の霧嶋。豊前の英彦なんど
世よ聞えたをど阿蘇い瑞西茅一の名山よて霊異まこと灼然
なり往年征西将軍の宮良懐親王南帝の詔に受て。大明と
隣好に修びたまひしより通問の使者往来たえせずそ
ころ明の成祖永樂皇帝より那の山に封して鎮國寿安の
山と崇めたまふとや。古れ史よ深山大澤龍蛇に産すと紀
て。名山大川の秀氣鍾まり凝まる時ーあをバ極て英雄豪
傑に釀ー生をことふふん。宮城廉助ゞ渾家い嫩柏と喚るす
ものふて宮司何某ゞ妹まり。この嫩柏婦人ふぐらも其心雄に
つれて良人ゞ經史を講ぞるに聽いらよ感激をるところあを
けん。一個の大願に發ー。景暮たる望ふまども。天下國家に

利益をべき一奇児ハ接けたまいまと。岳廟阿蘇權現と願ハ
奉まつり。朝ふし垢離ハうき東ハのぞそて遥拝。只願丹欵を
凝しこ禱りかくてのち良人廉助五十ハ過自己四十の坂よ登
そめて。不料まうと雅娠とぞなりふるふ。さそらふ儒者の妻よし
おもへば胎教といふことハ守て。着帯の月よりいまをしし言行ハ
慎しみ。紡績の餘力ふハ。幼少ものどもハ膝下ふ集合て忠孝
の道ハいひきかせるふ。教もるい学の半といへば。自他のたらにハ
功徳するべし。かくて嫩栢ハとや分娩期ハ過せど。臨盆べハ容
子もあらねば。自己いさらふて。親屬まで且あやしみ且あやぶ
むどころくして一月二月ハ夢の間よたちゆハ已ふ十五箇月
ふそふまふふる。嫩栢ハ不どし鬼胎をも懐むかと。安ハ

ろろもなくろろ。いつろその年も晩てて。春待前一日ふ
かまつ。闔家ハ注連かざるハ。逐茅はむハとのくりハあひてか
ぐまし。ふのゆ嫩栢ふと陣痛ゆるふぞ。大家慌ふためハ穏げ
婆よ符水よとしたさハぐ。一盞茶時ありて。陣痛も小止るにぞ
家公廉助ハ茅餌ふふくもと指揮をなし。柱よろろを洗ろ。
はいいて。おもハずうちねふりぬ。そのとハ誰といふらず咄々
起ね。山神降臨ましをいと呼ろ。ろよ驚き。但見ばハ彩の
白雲ふうち乗たる一員の金甲神出現ましまはその威
厳あたりハ拂て雄偉し。廉助喫一驚。慌忙退去て。席に
額突うちかしこまけふぐ。忽然紙門の裏頭より。呱々と産
声高やふふあけたるぐ。赤子よ仏氣まき大音なり。恰好

自鳴鐘も鳴响喨ハ。五更の一点とおぼしく。人々歡語ていと
執閙なり。廉助おぼえず頭を擡て回顧せば。山神ハかい
ふきとうせたまひて。初鵲屋角ふきぬかくふぞ。法と起て障
子ひらけバ。東天亮くとれしあけぐとのけしきぞ。やとら一
輪の嫩紅のごとえて看く御嶽の巔をとふき。一道の白氣こ
の家の破風口より起つて。横さまふ靉靆とたなびき。嶽の
半腹ふたちまちて絶ざるい不思議なりける光景なり。あの
暁誰いとともなく宮殿大人の荘院よりあやしの白氣を
のごとそうふし赤子の啼こえ方二丁ばかりの向ふまえ
ふい吉怪いうさまさきい神の授たまふ児の産きしゆふ
るべしと。此界隈の里人もいひあつとぞ。聽て年がはし

管家婆が赤子を襁褓ふたくきらき抱き来り。家公廉助に
見せて慶賀とかせば。廉助悦てこを見るふ。彷髪ハ艶
艶しくのび。玉と欺むくをどろくるが。眼のさやのとゞれたる
さまよ。よも凡庸ふかあらじ。こふ山神の霊異とて。久後ハ
國器ふも成べきものふちんと。未たのもしくぞもひける。
祥瑞あるふめでく。那の御嶽ふ象どりて乳名を阿蘓松と
名ばけ。ふよふく慈しみ育る。さきべこの児成長の後縁故
ありて駒澤何某と名を更め。大内家の執政とふて。その君
を賢者と仰がしゐ。國を富し民を惠を。まく幾十の書籍と
著ハして。世の利益とのこせる。伊人胸ふ韜略を藏し。才ハ経
濟を包唐山ふていい諸葛孔明天朝ふていい青砥藤綱ともおさく

阿蘇山の麓紅鶴林
ある宮城薫
助が家小正
月元日麟
児産る時
一道の雲氣
その家ろ
おおて嶽神
臨凡まして
霊異只ならず、

劣るまじき器量なり。且那の諸葛青砥ふも優てその標致世ふをぐれ威あつて猛らず。そよろづの風流ゆさへあしいけり。その弱冠しとき。天上の月老いゝる奇巧をきけんおろ美姐！一線の赤縄ゆ締しがあるときハ紊あるときハ解て。ゐどし縄こまゝ續き。後来めでたく鸞匹の逑好を遂年ぬ其根由ハ

家けひろまのいさかゆ。てすはうげれ作をふさふ。

あられ一村さめのくらしとふをうし。

叶一関の唱歌ようへとぐちゆ惹いざ上作。

○二回　花

さても宮城廉助ゐ乙の子阿蘓松ハ影の年月ゆかさね今茲僅十一歳。寿童の聞あるとも。大守菊池殿より召出さを。今日おん初て執謁ゆふしふける。菊池左馬頭殿作くし出をを御覧したまふよ。その顔色容止のあてゐるさま。露をふくめる花よ優千回をゞける玉ゑひとしく。あらゝも輝煌ぞかをなり。頭殿ちゃく召を、阿蘓松とハ汝よふ。詩作ふんどもふせろよし。今この庭階の風趣ゆ。即興に仕まつを

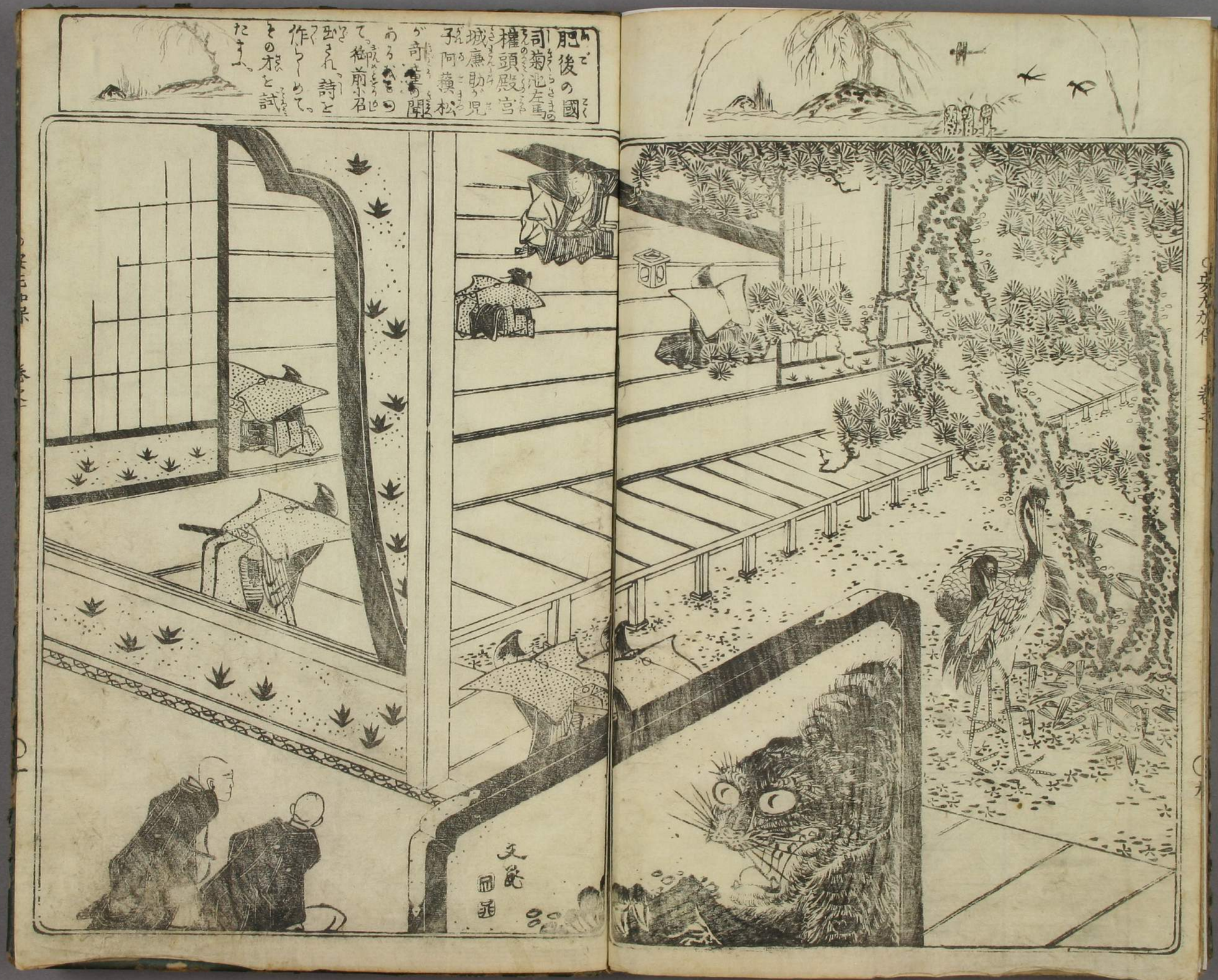
と仰せける、阿蘓松ひをふして上意ゆ畏。いさゝかるびをたる態もふく。をごゝろふ五言の絶句ゆ作くを。ふゝ油うち褰げ。雪まゝ王脆ゆ運らしゆく。清く白く繭紙よ一揮

と寫完てゐを呈ぐ。その字様一個々龍蛇のごゝく。墨痕いと旬やゝすゝ。殿御感るのゆなゝず。當坐よ二百石の新地と下さを。紅梅影の庖從列よ加へさせたゝふ。ををゝ阿蘇松

ハ直ゑ潭府ゑ止まりて。茲日向ゑく給事ゑぞもげゑる。この紅梅殿といゑ所以ハ。菊池殿ふゑく儒道を重んぜらを。賢明たぐひなく。一個の良臣吉弘市正といゑもの ゑ。登庸ひて執事とふしたゑ。吉弘ハ二まき忠直の人ゑて。寛猛ゑどよくゑつりぎつふゑりて領分よくれさゑり。黎庶總太守の仁徳ゑぞ仰ぎゑる。この君侯ほねゑ風流ゑ好ませたまひ。御物數奇のおゑり。美貌をぐをたる児姓十員ゑゑらを。個く緋を穿られふゑと襲させて。脇近ゑめしほっハせたゑふ。ゑを ゑ省るもの。その打扮の華麗ゑる ゑ賞。紅梅殿と称せしゑり。いつとゑく出ういひゑらハせしとぞ。此殿の頭領ハ。荒尾虎橘とて。當家の一老荒尾弥平左衛門が二男なり。父ゑ權勢ゑるゑまゑせ。日頃我意ゑほゑり旁若無人ゑぞふるまひゑる。さるゑ新桑の宮殿阿蘓松。君の恩寵ゑ蒙ふり。ゑきりゑ出頭をる ゑ猜を。同僚どもとほねゑ抵誣いひて嘲弄ゑせども。阿蘓松ハ生得て老趣き性ゑをべまをし。激慟ゑ謙選て。いつも悖らゑことゑふれば。那客氣の旁輩ゑもをせんをべゑくて止ぬ。ゑのち三四年ゑ間話ゑし。かくてのち阿蘓松十五歳。虎橘十八歳ゑまりゑる。今の春ハ當屋形の御先祖武徳院殿の御遠忌ゑあたもり。こをゑよりて。御香火院水禪寺ゑゑゑて。三晝夜の大法會ゑまりけらを。祖君冥福のたゑゑ水陸道場ゑ修せしめらを。その前後三日のあいだ。御領内の殺生ゑ禁。まゑ一面ゑハ青錢精米ゑ下行ありて。貧民ゑ賑したゑ。當日ハ三月十八日とぞことゑる。抑も

よの寶刹ハ寧一山の開基ふーして。代々支那より高僧渡来て。住持せらるゝ。往延慶元年開山寧一和尚。國主の招提に應ーて下向わり。當國第一の風水好き福地なりとて。一座の密林ふかき山脚なる伐闢き。土木の工なる悉ーて草創あるける大伽藍なり。宮殿樓閣宏壯と建ちぐき金碧甍日と相映ぬ。山門の額ハ皓月山の三大字ふて。南帝後亀山院の宸翰なり。後背のかとの懸厓より。一道の瀑布漲ぎるとち。中ゆどなる巖稜に激て段なるせべ。あたらも双龍の珠なるあらそふとなやまたる。那の邊をべて躑躅山吹ときをだを。藤波まゝうちゆらなつ。まと客殿のとまをいそ。欄の砌まて。那の飛泉のるゞを引入て。おほきやうなる池なるせり。澄きつる水ハ西洋鏡なのべたるがごとく。ゆどく五濁の垢なる滌よたへて。おを照鑑せバ毫髮をもかぞへたべし。水禪の名虛しからで。清浄なるさとりなるを。かくてその日よりけをべ。菊池左馬權頭武頼朝臣御泰詣ある。従者い大伴惣門の下馬場よのおさを。侍衛のものとをを具ーて。大雄寶殿より上せたまふ。御側室雲居の方い。御腰下小簇擁ける仕女たちなる。總て雪白なる裝束なるぞ。せさせ給ひなる。こい大切成御法の場なる故なりとぞ。その時佛殿の階下よ立並たる。例の紅梅伴の児姓共と其間遠らねバ一頭ハ紅一頭ハ白一對の美人隊なるして正ーく紅白の親隨なるをべ。あるとあるひとをなるをを喝来こげ王。知客察よハ。法施香資の墓子なるならべたて。庫裏の側よハ米嚢山のおとく積なるけて。正殿の中央なる

須彌壇よゝ。故肥州刺史從四品拾遺補闕武德院殿叙阿
大禪定門と寫たる御靈牌なまうけ。七寶の卓ゝ灰白色
ゝる。至正銅の瓶子ゝ一枝の金花なゝ挿さゝり。寶鴨ハ奇楠を炷
らし。銀燭ハ青煙なゝ吐俎豆ゝ盛たる百味ハ。山海の珍異を盡
たゝ。侍持智遠慧長老。勅賜の紫衣なゝ着し。綴錦の袈裟
なゝ絆ゝ纏。影の僧侶なゝ卒ひ。珊瑚の珠數をまぐりて。恭く
志く靈牌ゝ向ハせらきて。讀經のこゑいと殊勝なり。ゝの
とき。右左ゝ排列たる緇徒たち。種々の具なゝらして。法樂と
奏せらるゝふぞ。さしもふひろらゝる殿上。ひつそとゝづまり
て。物の音いとハたうをゝとゝろ。天人も花なゝ雨をべく。そぞろ
なる人もそのあハきをて。ほどし。浮泗のあわるさくちす。や
時なゝ移して。法會うたのごとく修のひ完てぬ。この時梵鐘殿
殷と響法鼓鼕々とふゝわたるゝぞ。ていや日中といきらきる。
菊池殿ハ智遠長老の誘ふひゝ應て。書院の上段ゝ坐なゝしゝ
らきゝ。はくゝと眺とたしたまへバ。客殿の造ざま修らいざま
ハさらふもいとず。庭の砂子も玉なゝ磨たらんやうなるゝ。池の
鏡のどゝふ靄とたゝて。まゝ仄ゝなる木末どものさうゝきなる
ころなるふゝいといたうけしきむきて。よゝたいきる櫻花ハ。枝
もたハむぢゝゝふさなをだきゝり。翠簾の外ようゝ和暖うゝ
ふちふく風ゝえならず。句たろけしなる。寫さゝゝといゝん風なゝ
あゝて。いまや散もはじめず。咲ものこらず。いとなるもひきふゝ
くぞゝえゝり。菊池殿一坐なゝ屹と見とたしたまひて。香爐峰


肥後の國
司菊池左馬
權頭殿宮
城廉助が児
孫阿蘇松
が奇怪の閲
あるかをり
て。鄙前小召
ぶされ。詩を
作らしめて。
その杖を試
たまふ。

の雪ハいふ〻と仰せけろふ。御側ちゝく侍坐せる群臣誰あつ
てその意ハ解をろものなく。個々顔見あハせて呆まをあたり
菊池殿いと没興げなこたびハ御聲高やうに。香爐峯の雪ハ
如何と呼ぜたまふ。遠侍よ在ける、御児姓宮城阿蘇松上
意ハうち聞半晌御前の動静ハ覘ひしぐ人々全然舊の
ごとく。黙坐して。あへて一語の回答ハ票しあぐるものもなくて。
泥塑を居たるやうなり。阿蘇松ハいと不堪技癢おもひ。その
まゝ立いと起て茶道風也ハ呼び。和主とやく御覧遮ろる
あの鈎簾とバ。高々と捲上うるべしと耳語ぬ。風也ハてろ
ハ得て。そのまゝ膝行落椽ふいたり。おほよそのいひ三四間
ばうり簾子をとり除けバ。忽地天晃たるがごとくそこら